



2012年
会報 春号
No.34

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

すっかり暖かくなって、春到来ですね。調布映画祭が終って一息つく間もなく、いよいよ第5回 City Lights 映画祭への準備も佳境に入ってきました。今年の映画祭の上映作品は、フランク・キャブラ監督の『素晴らしき哉、人生』と、是枝裕和監督の『奇跡』。映画祭のテーマは、『思い出そう、大切なこと』。これまでは、「視覚障害者も映画を観るんです。」ということ世の中に伝えよう。というメッセージを前に押し出していました。今年も敢えて、そういうメッセージよりも、障害の有無に関わらず、誰もが一緒に考えたい、思い出したい「大切なこと」をテーマにしてみました。二つの上映作品から「自分を信じること」の大切さや「生きること」「つながり」について、感じていただければ…と思っています。

映画祭を創り上げていくにあたり、City Lights にとっての「大切なこと」は何だったのだろうか？ということも、思い出してみました。敢えて、ボランティア団体としての活動にこだわった理由は何だったのかとか。何で「映画」を共に観ることにこだわっているのか？など。

まず、ボランティア活動にこだわった理由。それは、「自発性」と「誰にでもできること」を大切にしたいからです。モラルや大義に従って「良いことをする。」のではなく、「自発的に」自分の内からわき出した「想い」。それを大事にして、それぞれが、やりたいことをやりたいと思った分だけする。それが自然に、自由に展開していくのが面白い。と思ってやってきました。「見えない人にも映画の面白さや感動を伝えたい。」という想いと、「目が見なくても映画が観たい。」という想い。両者の「やりたいこと」がマッチして活動がはじまり、想いを共にする仲間が集まりました。さらに「このテレビドラマの感動を伝えたい。」とか、「こんな映画もおもしろそうだから企画したい。」とか、「自分は声に自信があるから、字幕朗読をやってみたい。」だったり、「映画を言葉で説明する音声ガイドづくりが面白そうだからやってみたい。」だったり。資格やスキルがなくても、また、障害の有無にも関係なく、誰もが「やりたい」と思ったことに飛び込める。そして、聴いてくれる人のことを想ったり、伝えたい映画やドラマに真摯に向き合うことで、もっと上手に表現できるようにがんばろうとか、他の人の意見を聴いて学ぼうとか、人と力をあわせて創り上げていこう！とか。誰に「こうしなさい」と言われるまでもなく、そういう気持ちも、自分の内からわき出してくる。それがいいんだな。と思ってやってきました。

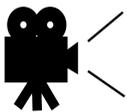
でも、こんな自由すぎる組織、他にあんまりないと思うので、慣れない人には、やりたいけどやっていいものかどうか。。。と、躊躇してしまうようです。なので、今年度は「やってみませんか？」の働きかけから、きっかけづくりをしていって、「やってみたい」とか「やりたい」と想う人にはどんどん参加の機会を増やしていこう。などと思っています。そんなことも考えて、今回の映画祭で上映する『素晴らしき哉、人生』の字幕朗読キャストは、視覚障害者も含めて、やったことのない人や、素人さんにも広く呼びかけました。いろいろな人にチャレンジしていただいて、この作品の感動を伝える一人の担い手として、自分を輝かせる喜びと、みんなと共に創り上げることの楽しさを、感じていただけたら嬉しいです。

それから、何で「映画」を共に観ることにこだわっているかという…「映画」はやはり、「感じる」芸術だと思うからです。知らず知らず、涙が溢れ出してくる。とか、胸がチリチリするとか、心がジーンとあたたまるとか、そういう理屈ではない「感動」を共にすることで、特に言葉を交わさなくても、共感意識のようなものを感じられたりもする。一方で、感動のポイントや、感動の度合い、評価も人それぞれにぜんぜん違うわけで、どんな映画が好きかや、どんな映画を観たいかも、その人のおかれている状況や時間、育ってきた環境や、歩んで来た道のりによって、それぞれに異なります。その、人間のあり様や生き方がさまざまであることも、とても面白いと思うのです。だから、もっと、いろいろな映画を、数多く、鑑賞できるようになるといいなあ、と思っているのですが、現状、シアター同行鑑賞会で鑑賞している作品は、シネコンで上映されるエンタメ系映画に偏りがちですね。これから映画会社がバリアフリー公開する作品が増えていったとしても、人気の高い邦画に集中していくでしょうし、製作事情や著作権等の処理の関係で、作品の偏りはどうしても出てしまうと思います。

そんな中、City Lights は、他とは違うオリジナルな活動をしていきたいものです。例えば、三番館やミニシアターとおつきあいを深めて、外国映画や旧作映画の鑑賞機会も増やしていきたいですし、劇場にこだわらず、カフェなどを貸し切って、上映イベントを行うなど、様々な角度から、映画の楽しみ方を学び、味わい、広げていけたらいいですね。

岡本太郎さんの『今日の芸術』という本に、「見ることは創ることでもある。」という小見出しのページがあって、興味深く読みました。かいつまんでですが、こんなことが書いてありました。「一枚の絵を10人が見た場合、10人の心の中に映る絵の姿は、それぞれ全く異なった10のイメージになって浮かんでいる。／鑑賞がどれくらい多種多様で、どんなに独特の姿を創り上げるか。それは、見る人の数だけ無数の作品となって、それぞれの心の中に描き上げられたこととなる。さらにそれは心の中で、その精神の力によって、常に変貌し創られつつある。／この単数でありながら、無限の複数であるところに芸術の生命がある。／鑑賞一すなわち作品を味わうことは、創造に参加すること。／絵を描きながら音楽をやっているかもしれない。音楽を聴きながら、絵をイメージしているかもしれない。そういう絶対的な創造の意志、感動が問題。／すぐれた作品に、身も魂もぶつけて、ほんとうに感動したならば、その瞬間から、あなたの見る世界は、色、形を変える。／創られた作品に触れ、自分自身の精神に無限のひろがり豊かな彩りをもたせることは、立派な創造です。」

以前、山田洋次監督から、City Lights 映画祭に「良い映画は良い観客が創る」という言葉をいただきました。岡本太郎さんと同じようなことを言っているのかもしれませんが。映画を味わい「感動」すること。それは創造であるんですね。生きているうちに、たくさんのいい映画に出会って、いっぱい「感動」していきたいですね。



活動報告

このコーナーでは、近日(1~3月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・『ミッション:インポッシブル ゴースト・プロトコル』1月15日 川崎チネチッタ
- ・『風にそよぐ草』2月6日 岩波ホール
- ・『金星』檀さんの活弁ライブガイド付き上映会 2月11日 下北沢トリウッド
- ・ゲノム18 音声ガイド付きプロレス観戦 2月17日 東京ドームシティホール
- ・『ロボジー』2月19日 ユナイテッド・シネマ浦和
- ・『麒麟の翼』2月25日 川崎チネチッタ
- ・『孫文の義士団』、『天から見れば』2月26日 東京都障害者福祉会館
- ・『しあわせのパン』2月26日 ユナイテッド・シネマとしまえん
- ・『キツツキと雨』3月4日 ユナイテッド・シネマとしまえん
- ・『ゴースト ニューヨークの幻』『英国王のスピーチ』『鉄道員(ぽっぽや)』3月10日11日 調布映画祭2012



調布映画祭レポート

『ゴースト～ニューヨークの幻』音声ガイド勉強会に参加して

(遥 はるみ)

私が初めて音声ガイド勉強会に参加したのは『英国王のスピーチ』でした。平塚リーダーから「モニターを必死で探している」とのメールをいただき「えっ？モニター？ロービジョンの私でいいの？今まであまり映画を観ていない私にできる？」と様々な思いと不安が頭の中をぐるぐる回っていました。でも、せっかくのチャンス、思い切ってモニターをお引き受けすることにしました。参加して、映画だけでなく、英国の歴史や文化など、たくさんの事を学び、皆さんと楽しい時間を過ごすことができました。推考したガイドを通して聞いた時はとても感動し、次回の勉強会を楽しみに待つようになりました。

『ゴースト』のガイド勉強会が告知されると、「わあ～、この映画好き！勉強会、楽しみ」と、早速、申し込みのメールを送り、ワクワクしながら待っていました。今回は、モニター4名を含め、総勢22名で、年明けすぐの1月8日からガイド作りがスタートしました。初日

のチェックから、さまざまな意見が飛び交い、ゴーストになったサムがどのような姿で映っているのかが最初の大きな課題になりました。他にも、いろいろなシーンで「ここは、どう表現したらよいか」「その表現は、少し違うのでは?」「ここは、ガイドがなくても音でわかる」等々、本当に様々な意見や質問が出され、勉強会は進んでいきました。

そんな中、私はあることで悩み始めていました。「あれこれ質問したり、指摘することで、皆さんが忙しい中、一生懸命作ってきてくださったガイドを否定してしまっているのではないか、その人を傷つけてしまっているのではないかと。私自身、他の人から何か言われると、落ち込んでしまうことが多く、さらにそのことをひきずってしまう性格で、また、自分が感じる疑問や気になる部分が他の人と違って「なんだか、私、浮いているなあ」と感じてしまい、発言がほとんどできなくなってしまったのです。

ガイド勉強会の目的は何かと自問自答する中、何も意見を言わないのでは、モニターとしての責任を果たしていない、これじゃだめだと思い直し、一歩離れて周りを見た時、リーダーを始め、ベテランの方々が、どのような言い方で相手に自分の意見やアドバイスを伝えているのかに気づき、はっとしました。

そう、ここに集まった目的は、より良いガイドを皆で作りに上げること、そのためには、自分の意見や疑問点をきちんと投げかけること、相手の意見や考えを受け入れ再考すること、一番大事なことを忘れていました。

ガイド作りを通して、自分とは違う考えを受け入れること、他とは違う自分を受け入れることをも学んでいるのだなあと思いました。今もシティ・ライツの第5回映画祭で上映される『奇跡』の勉強会に参加しています。勉強会では、ガイド作りだけでなく、誘導のお手伝い(初体験)をしていただいたり、初めての方ともお話ししやすいようにモニターが間に座ったり、ランチと一緒に食べたりと、親睦を深めています。なにげない会話や質問を通し、視覚障害者と晴眼者を結ぶ架け橋になれるのでは? そうなったらいいなあと思うようになりました。

音声ガイドにより映画の楽しみを知り、勉強会に参加して、皆で一つのものを作り上げる楽しさと喜びを知り、たくさんの人と出会い、私の心の扉がひとつずつ開いていきました。そして、明るく優しい『灯り』で満たされていったのです。これからも、「自分のできること」を皆さんと楽しみながら続けていきたいと思えます。

最後までお読みいただきありがとうございました。心からの感謝を込めて。

初めての音声ガイド作りとナレーション収録を終えて

(畠山知子)

この度、初めてシティ・ライツの活動に参加し、映画ゴーストの音声ガイドづくりからナレーションの収録にまで携わらせていただきました。

シティ・ライツの活動を知ったのは、自身のナレーションの力をなんらかの形で役立てることができないかと思い、ナレーションのボランティアを探していたことがきっかけでした。(ナレーションは、プロとして仕事にしているわけではないのですが、高校時代の放送部で学び、今は趣味であり特技として、時々友人の結婚式の司会などをしております)

個人的に映画は好きでよく観るのですが、音声ガイドを作る過程で、普段とは違った角度から作品を鑑賞することができました。作品を注意深く観ていくと、それまで気づかなかった表現や隠されたメッセージに気づくこともあります。

また、音声ガイド制作に携わる皆様とガイドの原稿を議論していく過程では、どの表現を使うのかについて、状況を適切に説明しているか、耳に心地よく響くボキャブラリーか、といった観点から注意深くひとつひとつの表現を選択していくことが、とても印象的でした。特に、モニターの皆様の鋭い感性は、普段自分が気に留めていなかった世界の存在に気づかせてくださり、今後、自身の本業の仕事を含め、様々な場面でのコミュニケーションを考えていく上でも、非常に深い示唆を得られました。

今回は、ガイドのナレーションにも挑戦させていただきましたが、こちらもとても楽しく取り組ませていただきました。収録は楽しかった一方、調布映画祭で完成したガイドを聞いてみると、なかなか思ったとおりに読めていないところがあり、歯がゆい思いもありました。

厳選されたひとつひとつの言葉を紡いでいけることは、制作からナレーションまで携わらせていただいたならでの喜びで、本当に貴重な経験をさせていただいたと思っております。拙いナレーターでしたが、収録にお付き合いいただいた、平塚リーダーに武藤さん、また一緒に音声ガイドを作り、ナレーションを私に任せてくださったチーム・ゴーストの皆様、本当にありがとうございました。また、調布映画祭で音声ガイドを利用していただいた皆様にも温かい言葉をたくさんいただき、大変うれしい気持ちになりました。聴き

手の皆様は温かく受け取っていただけることが何よりの励みになります。本当にありがとうございます。

「ボランティア」というよりも私にとっては趣味の世界に近い、このような活動に出会えたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、ガイドづくりからナレーションまで、引き続き携わらせていただきたいと思います。

結びに、今回ご一緒させていただいた皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。

■第5回City Lights映画祭～思い出そう、大切なこと

気づいてみれば映画祭も今年が5回め！特に昨年の映画祭は東日本大震災から3ヶ月足らずという時期でもあり、いろいろな意味で迷い悩み心に深く残るものとなりました。今年の映画祭について書く前に、ここに改めて昨年の映画祭への感謝の気持ちをお伝えせざるにはられません。本当にありがとうございました。

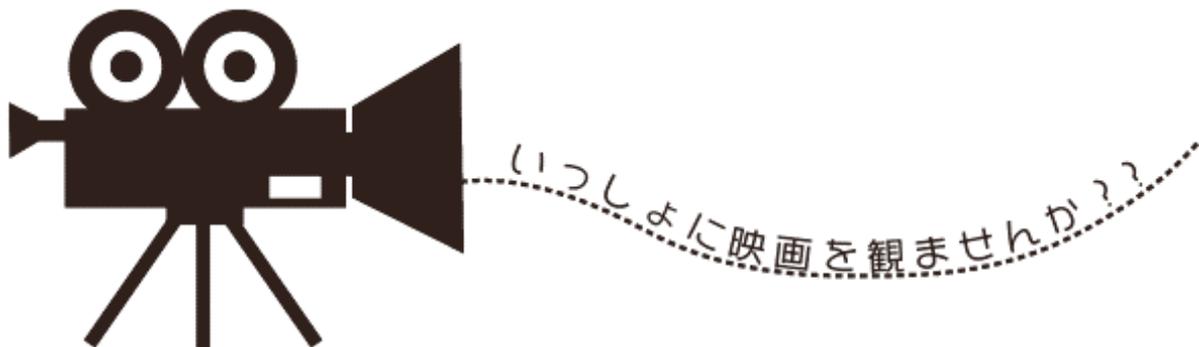
さて、今年の映画祭は6月24日(日)。イベント協賛という形でご協力いただいている企業の担当者の方々にご挨拶に回らせていただく度に、「今年は開催時期が遅いのですね」というお言葉をいただきました。確かに、映画祭は第1回が1月、その後2回がゴールデンウィークの期間中、そして、昨年は6月始めの開催…と、どういうわけかだんだん後ろにずれてきているのですよね。実はこれにはいくつかのわけがありまして、遠方からいらっしゃる方、その他GWでは料金的にもスケジュール的にも参加しにくいなと言うお声があったこと、5月は会場の抽選に当たりにくいこと、毎年6月前半は視覚障害者関係の大きな会議があるということなどなど考え合わせてのことでした。もちろん、どんなに考えても最良というのは難しいことではありますが、年に一度のシティ・ライツあげてのお祭りですので、皆様万障お繰り合わせの上いらしていただけると嬉しいです。

では、今年の内容について。きてくださいというだけでは興味を持っていただけないですよね。今年もちろん、魅力的な2本の映画を準備して皆様をお迎えます。一本めは以前からずっと観たいというお声をたくさん伺っていながら、上映権の問題で見送らざるをえないでいた「素晴らしき哉、人生」。1940年代のモノクロ映画であるにも関わらず作品構成は全く古めかしさを感じさせることのない、何度観てもまた観たくなること請け合いの名作です。残念なことにDVDにも日本語吹き替えが収録されていませんので、この機会にぜひぜひシティ・ライツの台詞朗読と共にお楽しみいただけるよう、周囲の方にも宣伝していただけたらと思います。

2本めは昨年公開されたばかりの日本映画「奇跡」。「誰も知らない」「歩いても歩いても」などの作品で知られる是枝監督の最新作は、九州新幹線開通という舞台で、小学生たちとその周囲の大人たちが様々なものを抱えつつ、日々を生きる姿を描いたもの。実際にも兄弟である、まえだまえだが、作品中でも離れ離れに暮らす兄弟をリアルに演じるほか、彼らの友達である小学生たちも、皆本当に生き生きとストーリーの中を駆け回ります。聞くところによりますと、是枝監督は子どもには台本を見せないのだそうで、場面設定だけを伝えて撮影して行く中で、持てる力をどんどん引き出していかれる技は、本当に感嘆に値します。またこの作品は、観る人の年代、生きてきた過程、今置かれている状況などなどによって、様々な捕らえ方のできる深く広い作品とも言えるのではないかと私は思っています。

「奇跡」上映後にはそんな深く広い作品をより感じていただけるようなトークショーの時間も準備していますので、併せてこちらも周囲の方々にお薦めください。必ずや新しい発見が生まれることと信じています。

さあ、6月24日は江戸東京博物館ホールへGO。お一人でも多くの皆様とお会いできるよう、ご協力どうぞ宜しくお願いいたします。





特集

映画祭をめぐる～アカデミー賞がらみの国際映画祭
を知ろう

何回目か忘れしました。アカデミー賞タイミングということで、アカデミー賞はすでにやったので、逆アカデミー賞であるゴールデンラズベリー賞を取り上げてみました。

<概要> (ウィキペディアより)

○ゴールデンラズベリー賞

ゴールデンラズベリー賞(1981年～)は、アメリカの映画賞である。毎年アカデミー賞授賞式の前夜に「サイテー」の映画を選んで表彰する。正式名はラジー・アワードであり、ラジー賞とも呼ばれる。

初期は正真正銘のB級映画が各部門受賞を独占することが多かったが、近年は輝かしい実績があるにも関わらず、どうしてもない役柄を演じてしまった俳優や、前評判と実際の出来のギャップが著しい大作などが受賞する傾向にある。この賞自体が一種のユーモアであり、本当にくだらない、つまらない作品を選ぶ場合もあるが、一方で出来はよいが惜しい作品や、強烈なカリスマ性や異色性が強すぎて一般ウケしない作品に与えられる傾向も強く、この賞の受賞作品が意外によく出来た面白い作品として評価されることがある。また、俳優に与えられる賞も、必ずしも酷い演技をした役者が受賞するわけではなく、第一回の「ジャズ・シンガー」で受賞したニール・ダイヤモンドは同じ作品でラジー賞とゴールデン・グローブ賞を同時受賞している。このように例から、選考される映画が必ずしも駄作、B級とは限らず、「興行的に失敗してしまい、映画賞の候補になることができず、ラジーの候補にさえなれない作品こそが本当の駄作」とする意見もある。

また、上述のように一種のジョーク賞であることから、受賞した作品が「一般ウケ」はしないが、マニアからは「カルト映画」と評価される作品の場合もある(『フォード・フェアレーンの冒険』『ハドソン・ホーク』『ショーガール』など)。

なお、ジョージ・W・ブッシュ大統領を激しく批判する内容で製作され、そのブッシュ大統領が最低主演男優賞を獲得した『華氏911』や、狙いそのままに「最優秀頭からっぽティーン向け作品賞」を受賞した『ジャッカス』のように、遠回しに正の評価を送られた作品も希ながらある。

「ヤジ」を意味する「Razz」から命名された「Razzie Award」が正式な賞名であるが、「Razz」のもうひとつの意味である「Raspberry」(ラズベリー:木イチゴ)の実を模したトロフィーのデザインにより「Golden Raspberry Award」とも呼ばれる。

ラズベリーには、ブーイングの音という意味がある。英語の「ラズベリータルト」(raspberry tart)が「fart」(おなら)と韻を踏んでいるため、おならをまねた音を指すようになった。

ラジー賞は米映画アカデミーの会員による投票・審査で受賞が決定されるアカデミー賞と同じく、「ゴールデンラズベリー賞財団」の会員による投票で受賞作品を決定する。ただし実績ある映画業界人によるアカデミーと違い、ラジー賞選考には一般の映画ファンが小額の会費(25ドル)を払うだけで投票権を有することもできる。また、2作品が同一部門で受賞することもある。

賞の意味合いからトロフィーを受け取りにくる者はほとんどいないが、第8回でラジー史上初めてトロフィーが受賞者の手に渡っている。当年、『ビル・コスビーのそれ行けレオナルド』で3部門受賞したビル・コスビーは、授賞式に出席はしなかったが作品の失敗を自ら認めており、のちに出演したテレビ番組の中でそのトロフィーを受け取った。

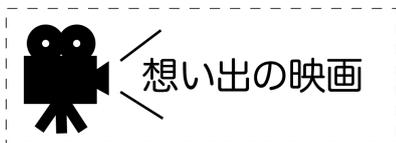
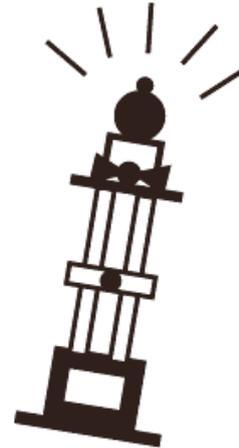
授賞式でのトロフィー授与が初めて実現したのは第16回授賞式で、最低作品賞・監督賞など7部門を受賞した『ショーガール』のポール・バーホーベン監督が出席し、「蝶からサナギになった気分だ」とコメントした。以降、第22回の授賞式には最低作品賞・監督賞など5部門を受賞した『フレディのワイセツな関係』の監督・主演のトム・グリーンが、第25回の授賞式には『キャットウーマン』(最低作品賞・監督賞など4部門受賞)で最低主演女優賞を受賞したハル・ベリーらが出席し、その懐の深さに授賞式参加者は満場の喝采を贈った。

特にハル・ベリーは『チョコレート』で受賞したオスカー像を持参して左手に持ち、右手にはラジー像を抱えてアカデミー賞主演女優賞を受賞した際の自身のスピーチのパロディを演じ切り、涙まで流して見せたことで聴衆から大喝采を得た。子供のころに母親から「胸を張って負け犬になれない者は、勝者にもなれない」と言われたことが出席した理由だと語った。

第30回では最低主演女優賞と最低スクリーンカップル賞を受賞したサンドラ・ブロックがハル・ベリー以来の授賞式出席を行って会場を沸かせたが、彼女はアカデミー賞の主演女優賞にも選ばれ、史上初めて同じ年に両方の賞を受賞した。ただ、ブロックはこれの際に「一つしかないオリジナルのトロフィー」を持ち帰ってしまっており(受賞者にはレプリカが渡されるが、受賞会場に受賞者が現れることはまれであるため、このようなハプニングが起こってしまった)、実行委員会がブロックに返却を求める事態となっている。

受賞作品(作品賞のみ)

- 2000年(第21回) 最低作品賞:バトルフィールド・アース
- 2002年(第23回) 最低作品賞:スウェプト・アウェイ
- 2003年(第24回) 最低作品賞:ジーリ
- 2004年(第25回) 最低作品賞:キャットウーマン
- 2005年(第26回) 最低作品賞:Dirty Love
- 2006年(第27回) 最低作品賞:氷の微笑2
- 2007年(第28回) 最低作品賞:I Know Who Killed Me
- 2008年(第29回) 最低作品賞:愛の伝道師 ラブ・グル
- 2009年(第30回) 最低作品賞:トランスフォーマー: リベンジ
- 2010年(第31回) 最低作品賞: エアベンダー



一思い出は、名画とともにいつまでも一。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードと共に御寄せ下さい！

(石坂 春香)

「劇場版ポケットモンスターミュウツウの逆襲」1998年公開

私の思い出の映画は大人気アニメ、ポケモンの記念すべき第一弾「劇場版ポケットモンスターミュウツウの逆襲」です。当時私は6歳、父と妹と私の3人で見に行きました。おそらくこれが私の映画初体験だったと思います。

幻のポケモン・ミュウの睫毛をもとに人工的に作られたミュウツウは自らの存在意義迷い、やがて人間への復讐を企てます。そんな頃、修行の旅を続けるサトシのもとにミュウツウからの招待状が届きバトル会場に招かれますが、そこではミュウツウの仕組んだオリジナルとコピーのポケモンたちのバトルが繰り広げられる…

悪を倒すだけの単純な物語ではなく、自分のアイデンティティや自分を生み出した人間への復讐という重いテーマを抱えているこの作品を分かりやすく伝えてきており、特にオリジナルとコピーのバトルシーンからのクライマックスは涙なしには見れません。ミュウツウの人間に対する醜いというこれまでの印象がサトシの行動によって崩され、「人間に作られて、しかも、戦うために生まれた」というトラウマも治って飛び立っていく展開にはさすがにささも覚えたほどです。

今、懐かしさを感じながら見返すとミュウツウのセリフ「本物だって…コピーだって…今は生きている」という言葉の深さを感じ、ポケモンもコピーも人間だって存在意義に関係なく、皆生きている生き物である、というとても大切なことを教えてくれたと気づかされます。ストレートな表現と演出で感情に訴えるポケモン映画、最高傑作といわれるミュウツウの逆襲、おすすめです。



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2011年12月25日～2012年3月31日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・板倉光隆(東京都杉並区在住) ・山本一代(三重県多気郡在住)

・飯嶋くらら(埼玉県三郷市在住) ・青野ちえみ(東京都文京区在住)

[賛助会員] ・藤田 憲治(静岡県賀茂郡在住) ・荒田孝平(埼玉県入間郡在住)

第5回 City Lights 映画祭のご案内

昨年に引き続き、City Lights映画祭を開催します。受付開始は、5月からとなりますが、内容について、詳細をご案内いたします。

第5回City Lights映画祭 ～思い出そう、大切なこと～

これまでの「バリアフリーな映画祭」はそのままに、さらに今年はお来場いただいた皆様と共に、人と人の繋がりを、忘れかけていた、純粋な心の大切さを感じあえる映画祭にして行きたいと思っています。



『素晴らしき哉、人生』 1946・アメリカ映画・モノクロ・130分

キャスト ドナ・リード、トーマス・ミッチェル、ヘンリー・トラバース

監督・原作 フランク・キャプラ

主人公のジョージは、いつも何処かツキに見放され、逆境にばかり立ち向かう運命にあった。自分のミスではなく大金を失ったジョージは、全てに絶望して自殺を図るが、彼より先に一人の老人が身を投げる。あわてて、助けたジョージに、老人は、自分は見習いの天使だと告げる・・・。

『奇跡』(日本語字幕付き) 2011年・日本映画・カラー・127分

キャスト 前田航基、前田旺志郎、オダギリジョー、大塚寧々、樹々希林、橋爪功ほか
監督・脚本・編集 是枝裕和

2011年3月に全線開通を迎えた九州新幹線を題材に、心が離れてしまった家族の絆を取り戻そうと奮闘する小学生の兄弟を中心に描いた感動ストーリー。鹿児島で、母親と祖父母と暮らす航一は、離婚した両親がやり直し、再び家族4人で暮らす日を夢見ている。福岡で父親と暮らす弟・龍之介と連絡を取っては、家族を元通りにする方法に頭を悩ませる航一は、九州新幹線全線開通にまつわる「奇跡」の噂を聞きつけある無謀な計画を立て始める。



プログラム 10:00 開場 11:00開演

11:05～13:15 『素晴らしき哉、人生』 13:15～14:15 (休憩)

14:15～16:25 『奇跡』 上映終了後 トークショー(ゲスト:是枝裕和監督(仮)) <終演予定17:30>

会場:江戸東京博物館大ホール

●JR総武線 両国駅西口下車徒歩3分 ●都営大江戸線 両国駅江戸東京博物館前A4出口徒歩1分

※両国駅からの誘導をご希望の視覚障害者の方は、必ず事前にお申し込み下さい。

※ご入場にはチケットが必要になります。お早めにご購入ください。

料金:前売り:1作品800円 2作品セット券1500円/当日券:1作品1000円

【チケットのご購入・お問い合わせ先】 City Lights事務局 TEL/FAX 03-3917-1995 Email eigasai5@citylights01.org



編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフ也大募集！
希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん)

この原稿を書いているのは、映画祭での上映作品である「奇跡」のガイド勉強会の翌日。昨日は雨の降りしきる1日にも関わらず、埼玉・千葉・神奈川・東京とあちらこちらからガイド製作のために10人以上の方々が集まってくださっていました。自己紹介の中ではこの作品に対する思いなども語られ、子どもって思っていたより大人なんだよねとか、ここに出てくる大人たちをどうしようもないと見るかどうかは観る人によりけりかもとか、子どもたちが生き生きしているのがいいよねとか、様々な言葉が出てきました。また、このガイドの言葉だとこんな印象を与えてしまうのでは？ここはしっかりと台詞を聞かせた方がいいのでは？ここは台詞で動作がわかるだろうか？などなどという真剣なディスカッションも繰りひろげられ、まあ、検討は前へ進まないこと進まないこと…(笑)。でも、これぞみんなで作る醍醐味。1本の映画を何倍にも味わいつくす贅沢な時間なのだと改めて感じた1日でした。

(会報編集課 石坂)

少し前ですが、東野圭吾の「麒麟の翼」が映画化と、その前にもドラマ化された「新参者」という作品に影響され、物語の舞台となっている日本橋を観光しました。日本橋は徳川幕府による京都をも超えるものとして計画された都市であり、日本橋は江戸を中心とする五街道、つまり東海道・甲州道・中山道・奥州街道・日光街道の起点に存在している。まさしく「はじまり」の地です。これは「麒麟の翼」の中で語られています。もうすぐ春。はじまりの季節！出会の季節！生活環境や人間関係等大きく変わる人もいます。この季節に乗じて心機一転！踏み出そうかなと思っています。

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは。毎年書いているのですが、自分はひどい花粉症持ちです。花粉症さえなければ素晴らしい季節なのに…といつも感じているのですが、今年はまったく問題がない！！例年に比べて少ないと聞いていたのですが、これほどとは…嬉しい想定外でした。おかげで体調ばつちりな日々を送っていますが仕事が忙しくて土曜日がない状態が続いています。まあ、なかなか上手くはないものです。ところで、これを書いている時期がちょうどアカデミー賞タイミングなので、今年度のアカデミー賞について感じたことを書いてみようと思います。作品賞が「アーティスト」というサイレントかつモノクロのフランス映画です。100年を超える映画の歴史の中で、技術の進歩とともにさまざまなタイプの作品が世に出ましたが、やはり映画は演出(脚本)と役者と音楽。この3つが映画の基本的な構成要素だと自分は頑固に思い続けています。CGとか3Dとか、技術に走った映画が量産される今、モノクロサイレント映画の受賞という結果は、映画の原点を大切にしようといった映画人的な感情が反映されたようで個人的にはとても嬉しかったです。

お忙しい中、今回の会報作成にご協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は7月10日。投稿される方は、6月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2012年 春号 4月10日発行 編集:吉川俊平 斉藤恵子 レイアウト・編集:石坂春香
発行者:バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局:〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

